

4-6	
主題	希望するものを食べ続けた看取り介護における職員の意識改革について
副題	食べたいときに食べたいものを食べられるだけ！

キーワード1 看取り介護	キーワード2 職員の意識改革	研究期間	15ヶ月
--------------	----------------	------	------

法人名	社会福祉法人 信愛報恩会		
事業所名	特別養護老人ホーム 文京大塚みどりの郷		
発表者：高橋 亮介	アドバイザー：中村 三枝子		
共同研究者：坂本 宏昭 谿 直樹			

電話	03-3941-6669	FAX	03-3941-6333
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	昭和63年に山手線の内側に初めてできた、入所60名、ショートステイ4名の特別養護老人ホームです。デイサービス、居宅介護支援事業所、地域包括支援センターが併設されています。東京メトロ新大塚駅より徒歩1分、道を挟んだ南側には区立大塚公園、東側には都立大塚病院と立地にも恵まれています。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

これまで、本人や家族の希望を取り入れた看取り介護を提供するという目標で実践してきたが、「施設で最期まで過ごしたい」という希望を実現することばかりに目がいき、「施設でどのように過ごすのか」という視点が不足していた。全身状況や嚥下の状況、排泄状況、バイタルサイン等は細かくチェックし家族との連携も密にとってきたが、果たして本人自身が望む最期を提供できていたのかという点においては不明瞭で、施設主導のケアになりがちであった。

本研究では、嚥下が悪く看取り介護が開始されたが「好きな物を食べたい」という利用者に対し多職種で話し合いを重ね、実際に食べてもらった事例を通し、そこから職員の意識の変化があったことについて発表させていただく。

《2. 研究の目的ならびに仮説》

施設で看取り介護を行うにあたって「施設で最期を」という本人や家族の希望はもちろんだが、それだけではなく「どのような最期を迎えたいの

か」という視点を持ち、関わる全ての関係者が共通の認識を持ち同じベクトルで看取り介護を進めることで、本来の本人や家族の希望する看取り介護を提供できるのではないかと。

また、そのためにも多職種協働が必須で、他職種で考えるからこそ実現可能な内容も増え希望を叶える結果となり、「みんなで協力すれば出来る」という意識も芽生え、それがやりがいになり、職員の働く意欲の一部となるのではないだろうか。

《3. 具体的な取り組みの内容》

本研究で対象となった利用者を紹介する。
86歳 女性 平成5年入所 要介護5
看取りとなった経緯：誤嚥性肺炎で入院。入院先の担当医師より「嚥下の状態が悪く、どのような形態にしても喉に停滞してしまい誤嚥してしまう。これ以上経口摂取するのは難しい。IVHにしても1年持てばいいだろう。」と診断される。認知症は軽度で、自分の意思を伝えることはでき、本人、家族ともに、たとえ誤嚥をしたとしても長年生活した施設に戻って、最期まで口から物を食べ

たいと希望され、看取り介護開始となる。

食事はペースト食を少量提供していたが、ある時本人から、「(特定の) カップ焼きそばが食べたい」と訴えがある。昔からカップ焼きそばが好きで、施設でも自分で作って食べていることが多かった。これを実現するためにカンファレンスで検討することとなる。

①通常の形態だと誤嚥するリスクが高い。

②本人の希望する物を食べさせてあげたい。

という2つの意見に分かれたが、少しでも本人の意向に沿った形で生活してもらいたいということで、形態を変更して提供することとなった。

家族にも本人の希望やそれを提供した時のリスクを説明し了承を得た。どのようにしたら食べやすく、かつ誤嚥しにくいかを考え、何度も試行を繰り返し、麺を細かく砕き、本人にとって最善であると思われるものを器(食器)を含め提供した。

《4. 取り組みの結果》

介護職や栄養士、相談員、吸引器を準備した看護師が見守る中、利用者はゆっくりだが全量召し上がり「おいしい」という言葉を発した。それを聞いた職員も「やってよかった」「やろうとすれば出来ることは多い」という意識を持つようになった。それ意向、本人が希望する時には提供するようになり、職員全員が同じ手順で作ることができるようになり作り方のマニュアルを作成した。

また、本人が召し上がっている姿を写真に撮り、ご家族にも見てもらいながら食べている時の状況を説明した。家族との関係もより良好になり介護職員からの声かけが増える結果となった。これ以降も、職員が本人の「自宅にいきたい」という希望を聞き、実際に家族を伴って自宅や近くの天神様にお参りに行くこともできた。

嚥下機能が低下してきても、工夫を重ね、食べたいものを提供したり、行きたい場所へ行くことが本人の意欲にもつながったのか、退院後1年4ヶ月生きることができた。食べたいものを食べたいときに食べられるだけという当たり前のことをただけであったが、本人の意欲の向上につながり、家族の喜びとなり、そして職員の意欲をも引き出す結果となった。

《5. 考察、まとめ》

本研究にて2つのことを学ぶことができた。

①「質の高いサービスは職員の意欲を引き出す」

②「看取り介護は通常の介護の延長線」

1つ目の「質の高いサービス提供は職員の意欲を引き出す」ということだが、利用者や家族の希望を多職種で考え提供することが、満足できる介護サービスを提供するだけでなく、職員自身の意識の改革につながる大切なことであることが分かった。今回は看取り介護の中で利用者の希望を取り入れるという当たり前のことをただけであったが、そのことが利用者本位のサービスを提供しようという職員の意識を向上させた。職員の意識が向上することでさらに質の高いサービスを提供できるようになり、良循環が生まれ、それが職員のキャリアアップや定着率の向上につながるのではないだろうか。

2つ目の「看取り介護は通常の介護の延長線」ということだが、今までは「看取り介護だから最後に利用者の希望を叶えてあげなければ」という意識が職員間では強かったが、今回の取り組みを通じて、元気なうちから希望を取り入れることがその人らしい最期を迎えることにつながるという意見が職員からも出始め、今まで以上に取り入れようとする動きも見られ始めた。本研究で学んだことを生かし、今後も利用者本位を忘れずにサービスを提供し、魅力のある職場にしていけるよう精進したい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、家族に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- ・「平穏死」という選択 幻冬舎ルネッサンス新書 石飛幸三
- ・その人らしい看取り支援業務 実践 Q&A 日総研出版 水野敬生 監修・執筆
- ・「平穏死」10の条件 ブックマン社 長尾和宏
- ・介護施設におけるターミナルケア 暮らしの場で看取る意味 雲母書房 鳥海房江

《8. 提案と発信》

なし